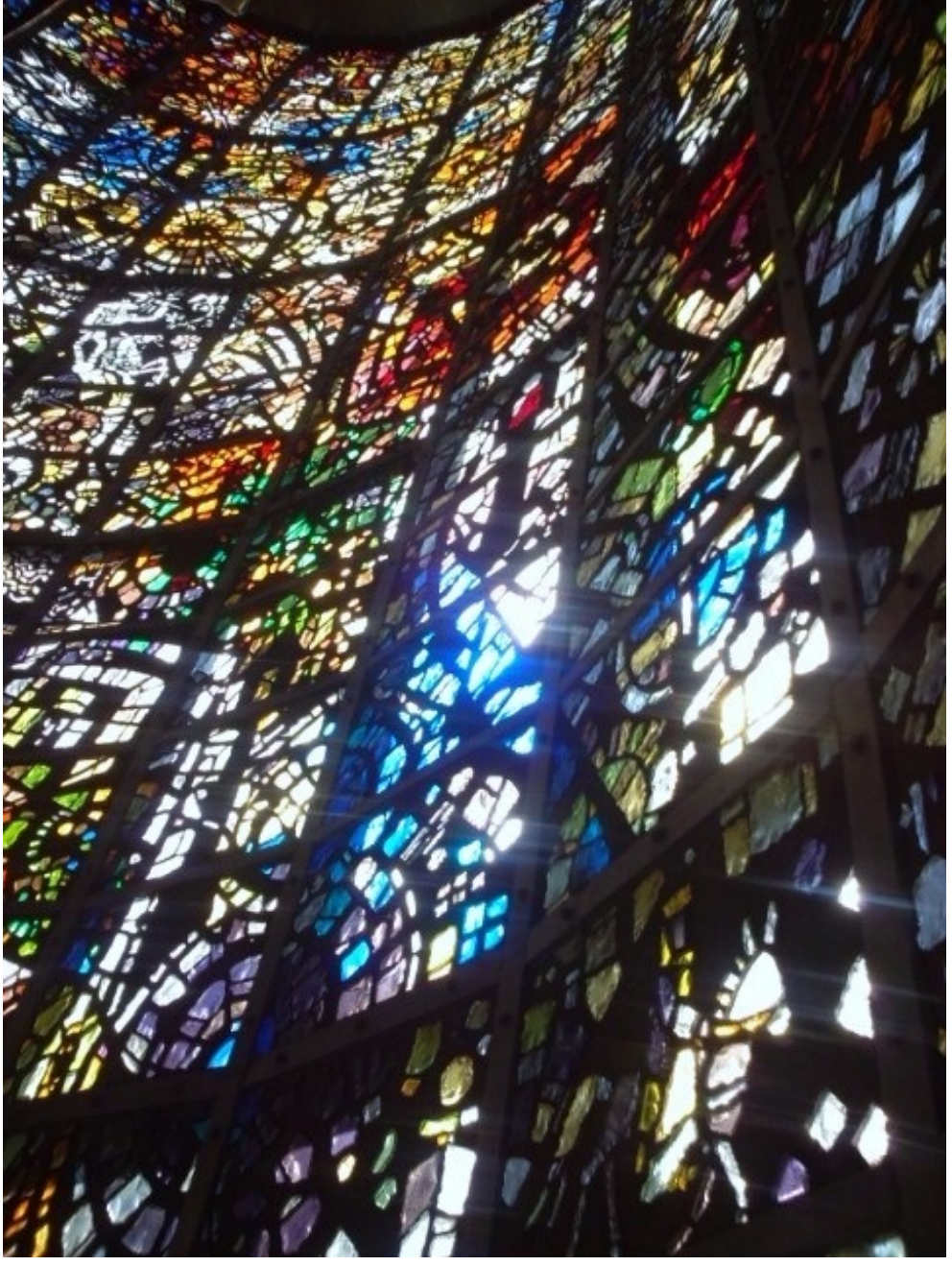

迷路のような道からは、いつ牛が出てくるか分からないです。気をつけるのがよいでしょう。地面に落ちている赤いシルは血ではありませんから、ノープロブレム。それから……。
私はいつまで続くか分からない注意を手で遮った。
「毎年顔を合わせているじゃないの。何回同じ話を聞けばいの」「オー、すみません。これは、くちくせなのですよ」「くちぐせ」ゆっくりと教える。
「くちぐせですね、くちぐせ」オーナーは素直に、何度も口の中で繰り返している。
今まで彼にどれだけの日本語を教えただろうか。去年は「やむをえず」を教えた覚えがあるが、きちんと習得しているのだろうか。少なくとも私のヒンディーより、彼の日本語の方が達者であることには、疑いの余地がないのだが。
壁には何年前のものか分からないポスターが貼られている。むかし日本で大人気だった不良猫の、なめ猫である。年々色あせてくるので、いい加減に剥がしたらどうかとアドバイスしても聞く耳を持たない。
「ファニファニーでかわいいですから、それに日本のお客さんが必ず見ます。そして喜びます」と言いながら取れかけた画鋲を親指で押す。
このレストランのオーナーは日本贔屓だ。メニューには美味しくないけれど「うどん」もある。ここまでの旅で胃を痛めている旅人も多いので、なかなかの人気メニューらしい。 そして店の名前は「ガンガーＦＵＪＩ」 インドの一番の川と日本の一番の山を組み合わせて決めたらしい。同じ名前の安宿も経営しており、ときおり重そうなバックパックを背負った日本人が 「ドゥーユーハブアルーム」と片言英語で飛び込んでくる。
「シュア、オンリーワンハンドレルドルピー、ワンパルソン」
Ｒの発音はインド人のそれだ。初めて耳にすると違和感があり、よく聞き取れない。しかし慣れてしまうと耳に心地よい。
飲み終えたジュースの代金をテーブルに置き、店を出る。牛に注意しながら大通りへ、突き当たりを左へ折れる。両サイドにひっきりなしに商店がひしめく道を真っ直ぐ進めば、目的地はすぐそこだ。沐浴を終えた人の波をかき分けながら進むと、目の前には階段状になったガート（木浴場）が現れる。そしてその下には深い広いガンジス川。 私はこの川をインド人と同じように愛を込めてガンガーと呼ぶ。
　テレビや雑誌では、ガンガーを聖なる川と称し、インド各地からは終の地としてヒンズー教徒の人々が押し寄せては、祈りを捧げる姿を伝える。 その映像や写真は、それらの情報しか知りえない人に対して、この川は、身を清め、カルマ落としをする人たちのためだけに存在しているかのような誤解を与えている。 実際に足を運んでみれば、その川は全ての人々のために存在していることがよくわかる。泳ぐ子供、食器を洗う人、チャイを売る人、土産物を押し売りする人。何度来ても、多くの人々の熱気に逆上せてしまいそうになる。ふと遠くに目をやると、死体が流れていることもある。この川は生きている人だけではなく死者のためにも存在しているのだ。
「ヤキバ、チーププライス」「ガンジャー・ハッシシ・ガンジャー」「ジャパニー、チェンジマネー」 ひっきりなしに声がかかる。この街では数多いる神々に祈りを捧げてさえいれば、大抵のことは許されるのだろうか。

それがたとえ麻薬の販売行為や、睡眠薬強盗といった犯罪であっても。カオスという言葉の真意を私は知らないが、この国を、街を訪れた人の多くがこの言葉を口にする気持ちは理解できる。この街に暮らしてみれば、その断片だけでも知ることができるのだろうか。
物売りの声を無視してガンガーを眺めていると、背後から日が落ちてきる。茶色だった川面は深い、深い緑に変わる。 私のいる一番大きなガートの左隅にそろそろ彼がやってくる。
彼とこの地で会うようになってもう五年目だ。私とおなじバックパッカーで、一年のうち半分くらいは世界中を旅しているらしい。もちろん仕事での海外出張も含めてということだが、詳しいことは知らない。私は東京の旅行代理店で働いている。勤め人になってからは、学生時代のような無謀な旅とは無縁になり、年に数回の連休を利用して旅するだけになっていたが、それでも夏には必ずインドに足を運ぶ。
それは、彼に会うためになのか、それともガンガーが恋しいためか、自分でもよく分からない。
「やぁ。ガンガーへようこそ」 彼は、私の背後から声をかけながらやって来た。インドでよく見かける喧嘩凧を手に持ったまま隣に座った。 「いつからインドに入国していたの」　 「一ヶ月くらい前かな。ネパールからね」　 「どうして凧を持っているの」　 「宿の屋上でそこらの子供達と遊んでいたんだよ」 クルタを着た彼は日に焼けて痩せていた。しばらく深い緑を二人で眺めてから、お決まりのレストランで大皿に載った定食、ターリーを食べることになった。
　私は手でカレーを食べるのが久しぶりなので、うまく口に運べない。正面に座る彼は上手に人差し指と中指の上にカレーを乗せて親指で口に押しこむ。
三本の指以外は決して汚れない。ベテランの域に達している食べ方、その仕草がとてもきれい。あまりにきれいなので、彼が食べ物を口に入れる瞬間の開いた口、その口の中に見え隠れする粘液や、唇の動き、または喉が傾けたグラスの中の液体を気道から食道へと運ぶ動きをじっと見つめる。
しかし彼には悟られないように。見惚れる私はますますカレーを指の間からこぼしてしまう。
結局私はスプーンを借りた。
ホテルガンガーＦＵＪＩは名前が大げさだが、幾つかのドミトリーとダブルベッドルーム、最上階に食堂とビリヤード台のある小さな安宿だ。その一室が数日の間、彼との生活を楽しむためのお城になる。ベージュ色のペンキを塗った壁、天井にはファンがゆっくりと、そのくせ大きな音を部屋中に響かせながら回る。シャワールームにもちろん浴槽はない。壁に固定されたシャワーヘッドから水が出るのみである。ホテルの外壁に大きくホットシャワーとカタカナで書かれているのに、どうしてお湯が出ないのか聞いたことがある。オーナーは 「お湯はボイラーの機嫌の良いときはでますよ。それとあなたの日ごろの行いがよければね」 そういうことらしい。やっぱりと言うか、残念ながらと言うべきか、私はこの定宿で一度もお湯を浴びたことが無い。彼は一度だけあると話していたが、本当かどうか怪しいものだと思っている。
　べったりと体に張り付いた洋服を脱ぎ、水を浴びる。さっぱりしてからインドのパンジャビードレスに着替える。パジャマの語源とも言われるこの服は、軽くて動きやすい。
ドレスの生地は、メインストリートにあるシルク店で店員と相談しながら、膨大な布の山から二時間かけて選び出したものだ。どうせすぐに彼に脱がされてしまうのだけれど、少しでも似合う

ものを着ていたい。若草色に銀の刺繍の付いたものと、淡いピンク色に金の刺繍の付いたものを求めた。
ベッドの上で彼と二人でファンを見つめる。どうして私達肌を重ねているのかしら。好きだからでしょ。どうして私達、ガンガーで会うのかしら。好きだからでしょ。どうして東京では会おうとしないのかしら。彼は静かな寝息をたてはじめた。
五年間、約束もない地へ足を運んできては愛欲に溺れてきた。
だらしのない自分から目を背け、「大人の恋愛」というご都合主義のベールに身を包み、それを楽しんでいる自分を思ってみた。そんな想像の中の自分がリアルで、あまりに心細そうにしているので、 「一年に一度の恋愛ゲームを楽しむのも、人生においては極上のスパイスじゃないの」と声をかけ慰めてみた。
　しかし、その声は天井のファンの音にかき消されて、可哀想な私の耳には届かない。
　早朝、ゴールデンテンプルの鐘の音で目を覚ます。外にでると真鍮の入れ物にガンガーの水を入れて寺院へ向かう人々の波に飲み込まれる。私はその波に逆らわずに流されるのが好きだ。足の力を抜いて、汗の匂いと捧げものの匂いに囲まれて右へ、左へどこへ行くとも決めずに、私にかかる全ての荷重に従い彷徨う。
　聞き取れないヒンディー語のシャワーを浴びながら人の背中、肩、頭、私の目線上にある全てのものをただ瞳に映してゆく。瞳、いやこのときの私のそれは瞳孔としての役割を一切担わないラムネに入っているビー玉のようなものなのだろう、このときに見たはずの景色はいつ思い出そうとしても、耳に残るヒンディーシャワーの音、体で感じた人の圧力のみでしか、甦らないのだ。何も考えずに人の波を泳ぎ続ける。ふと視界が開け、風を感じるといつでも目前にガンガーがあった。その茶色を目にするとき、私のビー玉は、瞳に変わる。
沐浴する人々で埋め尽くされたその川は、ふだんは茶色く濁っているはずなのに、まるで画家のパレットのように鮮やかになる。女性の着ているサリーの色。ピンク、レッド、グリーン、男性のクルタの麻の色。そしてまぶしい朝日のゴールド。金色のパレットを眺めながら甘く、熱いチャイをゆっくり飲む。すると音もなく隣に彼が座る。 「おはよう。またここで会えたね」口の中を真っ赤にして話しかけてくる。 「紙たばこ、すごい色だね」　 「そこで、両替の客引きからもらったんだよ」　 朝食を一緒にすませて店から出て別れる。日中行動を共にすることはほとんどない。彼が何をしているのか、どこへ行っているのか知らない。時どき買い物袋を提げて帰ってくることもあれば、ただただ口の中を赤くして帰ってくることもある。
　私は一人で映画を見に行くことにした。性描写に厳しいインドの映画は、過激なシーンは無い。しかし女優の体つきはみなエロティックで、サリーの上からでもボディーラインが出るようにと、女優に水を浴びせることが多い。大降りの雨、おっちょこちょいがベランダからこぼした花瓶の水、流れの速い川。ストーリーを遮るように何度も映し出されるダンスシーンでは、豊満な胸をユサユサとゆすり、腰をくねらせる。下手なセックスシーンのある映画より、エロティックだ。
　帰り道、お気に入りのシルク店に立ち寄り、赤い生地に金の刺繍のされたサリーを一着作ってもらうことにした。今日の映画の女優が着ていたサリーとよく似たものだ。それに合わせるよ

うに、細い金色の腕輪を二十本買った。サムズアップを一本いただいたので、炭酸が苦手な私は、店員とおしゃべりを楽しみながら、ゆっくりゆっくりと口に運ぶ。他愛のない話をしているところへ、オーナーの娘が手をヘンナだらけにして帰ってきた。とてもきれいな細かい絵が、指先から肘の辺りまで書かれている。 「どうしたの、そのヘンナ」 「明日、結婚式なの。その準備なのよ」 恥ずかしそうに、でも少し誇らしげに私に両手を見せる。 「娘はね、この街で大きな銀細工を販売している店に嫁ぐのですよ」 うれしそうにオーナーが話す。私がこの店に初めて買い物に来た五年前は、彼女はまだ子供だった。いつも私が店に来ると、はにかみながら片言の英語で話しかけてきては、お菓子を勧めてくれた。自分よりずっと年下の女の子が、この五年間で女になっていた。私はずっと変われないままだ。 花嫁衣裳を見せてもらった。精密な見事な金の刺繍、華やかな色彩、美しいシルクの光沢は、触らなくても上質なものだと分かる。その布に包まれた若い、まだ幼くも見える美しい娘は、あしたインドの神々の前でこれから夫となる男性に永遠の愛を誓うのだ。 サムズアップを少し残して私はお店を後にした。

私より少し遅れて彼は小さな買い物袋を持って部屋に帰ってきた。

夜、ホテルのビリヤードで彼と勝負した。賭けるものはお金や物ではつまらない。勝者の言うことを一つだけ何でも願いを聞くこと。私は、去年別れた恋人の影響で、ビリヤードが得意だった。日本の家の押入れにはキューが二本、転がっている。ズルイとは思ったが、私が勝つための勝負だった。ナインボールを三回ゲーム。そのうちの一回はわざと負けた。 「完敗でした。一回手抜きしたのも分かったしさ。願い事はなんですか、ご主人様」 「明日の朝、一緒にガンガーに沐浴をしに行きましょ」　彼は驚いた。私が何度インドに足を運んでも決してガンガーに入らないことを知っていたからだろう。 「どういう風の吹き回し？他国の宗教の聖地を汚すようで、嫌だって言ってたじゃない」 「なんとなく、ね」 インド映画の感想などを話した後、彼がさきほどの小さな買い物袋の中の物を私にプレゼントしてくれた。小さなスタールビーの付いたかわいい指輪だった。 「君は、いつも深い赤い色をしているから、ぴったりだろ。ま、勝手な僕のイメージなんだけれどね」 そう言いながら、私の薬指に指輪をはめた。その指輪の、金属の冷たい感触が私の心臓をチクリと一突きして、少し血が滲んできた。同時に少し意地悪い気持ちが芽生えてきた。 「昨日も聞いたけれど、どうして日本で会わないのかしら」 「そんなに、疑問になるのかなぁ」 「君は僕と、そんなに一緒に居たいと思うの」 黙ってうなずいた。 「僕は変わらない自信がないんだよ。年をとれば皺も増える、髪も抜けるかもしれない。口元がだらしなくなるかもしれない。だから変わる僕を変わらず好きでいてくれる人がいるかどうか、という問題なんだよ。でも、だからって簡単に返事をしてはいけないよ。よく聞いて欲しい。僕がいうのは例えば、白髪。うん、それは突然気付いてしまうものなんだよ。だって、白髪はさ、ある日突然鏡の前で、何本も何本も見つかるだろ。昨日までまったく気付かなかったのにさ。一本白くなっただけでは自分でも気付かないものなんだ。皺だってそうだよ」 喉を鳴らして水を飲みながら続けた。 「要するにね、自分でも気付かないほどの小さな変化を、いつも見つけてくれて、それを受け入れて愛してくる人じゃないと、一緒にいる自信がないんだ。奥さんが、「あなた最近、白髪が増えたけど、その代わりに似合う髪形に変えるのはどう？」というのはダメなんだ。減点された部分を何かで加点して補うというのが、僕は嫌なんだ。分かるかな。君の事は好きだよ。毎年毎年好

きだよ。でも僕は君が日本でどんな暮らしをしているのか知らない。もしかしたら好きな食べ物や好きな音楽が合わないかもしれない。僕はラジオが好きだけど君はテレビが好きかも知れない、そしてなによりも、そういうふうに僕を愛してくれて、さらに言うなら、いや、どちらかというとこっちのほうが重要なんだけれど、僕が君を、そういうふうに愛せるのかということが、分からなくなってしまうんだよ」 そして最後に「おしまい」と言った。

彼がこんなに一気に話すのは、初めてのことだった。内容を、頭の中で反芻してみた。これではまるで子供だ。例えば、いつまでも自分の父親は世界で一番かっこいい、母親はいつまでも若くてきれいで、髪が長くてフワフワしている。そんなふうに信じて、現実を見ることができない幼稚園児のようではないか。

私は、彼が無性に愛おしくなった。そして、いつもより深く愛欲に溺れた。溺れながら頭の片隅で考えた。子供なのはどっち。本当に現実をみることができないのは、どっち。 どっちでもいいよ。 彼の声が聞こえた気がした。

いまは、このカルマにもっともっと溺れてしまえばいい。

早朝、まだ暗いうちから目が覚めてしまった。彼はまだ寝息をたてている。私はバックパックの中身を整理し、メモ帳に自宅のアドレスを、小さな字で書いた。今までお互いに連絡先を教えあったことはない。ただ、日常は二人とも東京の空の下のどこかにいる、知っているのはそれだけだった。このアドレスに彼が連絡をくれるかどうかは分からない。しかし、本当はもっと早くに、こうしてけじめをつけるべき問題だったのだ。連絡がなければ、おしまい。連絡がくればまた違った関係に慣れるのかもしれない。今夜、私は夜行列車でデリーへ戻ろうと決めていた。彼の寝顔をしばらく見つめてから、昨日仕立てたサリーに着替えて寺院の鐘が鳴るのをまった。「沐浴日和だね。タオルを持って行こう」　いつもは人波に流されている道を、彼と手をつなぎ、歩く。瞳はビー玉にならなかった。すべてのものをしっかりと映し、脳裏に焼き付けてゆく。大通りに出ると、さらにすごい人の波だった。流されないように、しっかりと足に力を入れてガンガーへと続く道を歩く。つないだ手に付けた金の腕輪が、時どき微かな、くすぐったくなるような金属音を立てた。彼が私に何か言っているけれど、ヒンディーのシャワーにかき消されてしまい、よく聞き取れない。おそらくすごい人だとか、暑いだとか、そんなことだろう。聞こえたふりをして頷く。私は彼の耳に届かないのを承知で初めての言葉を口にする。 「わたし、狂おしいほど、あなたが好きです」 いつも待ち合わせをしているガートから川へ入る。ヌルリとザラリが同時に私の足裏を刺激する。くるぶし、ひざ、もも、こし、むね。私の体が茶色の川に沈んでゆく。 「思ったより冷たくないね」 「うん、実はさ、俺もまだ二回目なんだよ」 「そうなの」 「君の言葉が気になっていてね」 「宗教を汚すってこと」 「そう」 「ごめんなさい、ヒンズー教徒ではない我々が云々というのは、思いつきの発言だったの。本当は怖かったのよ、この水が……。この水に流されている人間の、あらゆる生き物たちの澱が、汚れが、そして人々の背負ってきたカルマが私の体に染み付きそうで。カルマは私も生まれたときから背負ってきているものなのに」 「君は何を背負って生まれてきたの」　それは切ってしまいたくても断ち切れない。捨てようと思っても手放せない。苦しくてもがいても、救いがない。そんな男と女のカルマ。心の中で答える。

　流してしまおう。この地で出会い始まったカルマだ。この地に帰そう。
ふと、この五年の間に日本で付き合ってきた男性達の顔が浮かんでは消えた。本気で私を愛してくれた人、なんとなく一緒にいた人、不倫の刺激だけを求めていた人。結婚を申し込んでくれた人もいた。それでも私は、その男性達を好きなふりは出来たけれど、本当に好きになったことはなかったのだ。
茶色の川の中で私と彼はずっと手をつないでいた。私の周りだけサリーが反射して赤い水になっている。いつもガードから見下ろしていた色の一つになれたのが、なんだかうれしくて水の中で、重く感じるサリーを精一杯ヒラヒラさせてみた。私はいま、金のパレットの一部になっている。赤い色を川面に映しながら、少しだけ泣いた。 「私、今日デリーへ発つのよ、日本に帰るの」 「急だね。いつもより短い滞在だ。僕は明日も一緒にいるつもりだったのに」 「そうね。でも決めていたのよ。それに私、インドにはもう来ないわ」 「なぜ、インドが好きなんだろ」
　一生懸命引きとめようとする彼の顔は、怯えていた。 「約束がないというのは、こんなに怖いことだったのか」ぽつりと言った。 二人の沐浴の瞬間に、彼は「私を愛している自分」を知った。心も、体も、魂も彼の全てが私に向かってきていた。言葉に出さなくても分かる。私が彼を思うように、いや、それ以上に彼は私を恋しく思っている。
部屋に戻ると彼はどこにも出かけずにベッドに横になっていた。 「寂しいのね」　うん。 「わたしもよ」　うん。 「愛しているのね」　うん。 「私もよ」 大きな歓声と、にぎやかな音楽が通りから聞こえてきた。あまりに大きな音なので窓を開けて見下ろしてみると、結婚式のパレードだった。新婦は昨日の娘さん、新郎は、銀細工店の跡取りだったか。その幸せな二人を取り巻く大勢の人たち。フラワーシャワーが日の光で輝いている。花嫁衣裳もキラキラしている。着ている人の幸せを反射しているような、眩しいくらいの美しさだ。 「見て、結婚式」 「うん、きれいだね」 長い長いパレードが見えなくなるまで、窓から見送った。
　列車の発車の時刻がせまっていた。プラットホームにあるプラスチックのイスに横並びに座りながら、静かにチャイを飲んでいた。彼が私を見送りにくるのは、初めてのことだった。いつでもガンガーで言葉のない次の約束をして別れていたから。私は彼からもらった指輪を見つめていた。 「探すよ、君を。必ず見つけるよ。一緒にいるほうが自然なんだ。僕らは」　 「それじゃ、いつか、また。よい旅を」
　いくたびかのガンガーでの出会いと別れを繰り返し、私と彼を結ぶ絆は想像以上に強く太くなっていた。その絆を人は運命の赤い糸というのだろう。もし本当にその糸があるとするならば、水の中で堅く絡まっていた私と彼の指先は、サリーと同じ赤い色で繋がっていたのだろうか。
ふと、ガンガーに潜れば見えたかもしれない、と思った。
いつも私は夕暮れのガートに腰かけ、彼を待っていた。
いつも彼は夕暮れのガートの中に、私の姿を探していた。
　これから待ち合わせの場所は、ガンガーのほとりではなくとも、彼と私はきっと出会う。
　列車の窓をスライドすると心地よい野原の匂いが入ってきた。頬を掠めるのは、ガンガーの水を感じさせる風だ。今朝、その水にいたのに、二人で居たばかりなのにもう懐かしい。 私はその風に小さくちぎったアドレスを一枚一枚、のせてゆく。ヒラヒラと白い蝶が広い、広い黄土色の

大地に羽ばたいていった